

北米の女性スポーツ研究の研究方法について

—研究対象とその視点から—

前田 博子*

A study of Women's Sports Studies in North America

— Special reference to research methods and objects —

Hiroko MAEDA*

Abstract

Recently participation in women's sports has increased remarkably, but the state of men's is still further advanced. That is one of the most important problems of women's sports studies. The purpose of this study is to investigate research methods and objects of women's sports studies.

At the present time, most research on women's sports has focused on the actual state of those sports. Now, a lot of attention must be paid to the social environment of women's sports. In this paper, North American women's sports studies are analyzed.

The results are summarized as follows :

- A) In North America, 'social environment' is a very important theme of women's sports studies.
- B) Education and Mass media take an important part in shaping the social environment of women's sports. These two viewpoints seem to be useful for the studies in Japan, too.

KEY WORDS : *Women's Sports Studies, Social Environment, Education, Mass Media.*

緒 言

現代では女性のスポーツ活動が急速に増加しており、スポーツが男性の活動とは見なされなくなっている。また、その発展も高度化、大衆化の両側面を併せ持つ幅広いものである。このような背景から、特に女性のスポーツ活動を対象とした研究も積み重ねられるようになってきている。例えば、体育の科学では1952年から1983年までの30

年間で「女性とスポーツ」に関する論文は、自然科学系を除けばわずか16編しか載せられていない¹³⁾。しかし、1992年の1年間だけを取り上げても、女性に関わるテーマについては特集も組まれ、12編が見い出された。また日本体育学会においても、1998年から1993年までの6年間で社会学および心理学分野において女性を取り上げた研究は30題見られ、女性をキーワードとしたシンポジウムも持たれてきている。

*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

このように日本の女性スポーツ研究は量的には発展しているが、質的には女性のスポーツ活動の歴史と現状という実態研究の面に集中して行われてきていた²⁴⁾。このアプローチからは、男性のスポーツ活動と女性のスポーツ活動との相違は明らかにされてくるであろうが、その差異を出現する理由や将来像については有効な説明が困難である。従って、女性のスポーツ活動は相対的に見て未だ男性には及ばないが、これらの研究を用いることで、その遅れている面や劣っている面を改善することは期待し難い。

以上のことから、今後は研究対象とする女性を取り巻く環境、すなわち社会から女性が期待されている役割が作り出す環境を視点に入れた研究を行うことがひとつの方法と思われる。日本でもこの視点は近年盛んになりつつある女性学研究^{注1)}でしばしば用いられているが、女性スポーツ研究にはまだほとんどとりいれられていない^{注2)}。そこで、女性学研究所の進んでいる北米のスポーツ研究を検討することが有効であろうと思われる。

本研究の目的は、北米の女性スポーツ研究の研究手法の現状を明らかにし、日本の女性スポーツ研究に有用な視点を探ることにある。特に、ここでは女性スポーツの活動実態ではなく、活動を取り巻く環境に関する研究に着目した。

方 法

本研究では、女性を取り巻く環境に関わる女性スポーツ研究（以下、女性スポーツ環境研究とする）を選び出すため、まず用語を検討した。それを基に選出された研究を対象に、その動向を明らかにした。さらにそれらの研究の視点について検討を加え、その特徴と今後の可能性について考察を行った。環境とは、人間を取り巻いているすべての外的条件をいう¹⁵⁾が、ここでは主として女性であることから生じる社会的な環境を指している。

研究対象とした文献の検索は、データベース (Sports Discus) 1993年版を利用し、さらにオリジナルについて検討を加えた。特に、北米のスポーツ社会学のジャーナルである 'Sociology of Sport Journal' 及び関連文献についても研究対象とした。

結果および考察

I. 女性スポーツ環境研究の動向

(1) 注目すべき用語の選定

女性であることから生じる社会的環境においては、女性としてふるまうことが要求される。このように何らかの社会的場面において、特有の型をもって行なう行動様式を「役割」と呼ぶ。さらに、男女の性差を基礎とする社会的役割を性的分業、または性役割と言う¹⁵⁾。女性が社会で活動しようとする時、この性役割による規範がしばしば妨げとなる。いわゆる「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業である¹²⁾。この性役割は現在変わりつつあり、将来的には性による役割の差異は消失するのかもしれない。しかし、現時点では女性のおかれている環境が性役割によって規定されていることは否定出来ないであろう²⁰⁾。従って、「性役割」を女性を取り巻く環境を表す注目すべき用語として掲げたい。

性役割は 'Sex-roles' の訳語であるが、この意味を含む日本語には訳されていない言葉として 'Gender' がある。上記の意味で用語を選定するならば、英文での記述ではこの2語を取り上げる必要があるだろう。それぞれの意味を示すと、以下のとおりである¹²⁾。

Sex-roles : 男女が果たすそれぞれ固有の社会的な機能を述べる方法として社会学者が開発した概念。

Gender : 男女の生物学的、解剖学的な性を示すことばである 'Sex' に対し、社会的に押しつけられた男女の区別をするためのことばである。'Sex-roles' と同意語として使われることもある。

(2) 時代的背景

ここでは、'Sex-roles' および 'Gender' をキーワードに、Sport Discus を検索し、引き出された文献の時代的背景を考察する。検索の結果127編が見い出された。これらを発行年度に着目し整理したのが表1である。

表1 'Gender' 'Sex-roles' で検索された論文の時代的変遷

Year	Number
7 2	2
7 3	0
7 4	0
7 5	0
7 6	0
7 7	0
7 8	1
7 9	2
8 0	3
8 1	3
8 2	4
8 3	4
8 4	9
8 5	1 5
8 6	1 5
8 7	1 4
8 8	1 1
8 9	1 2
9 0	2 1
9 1	8
9 2	3

表から、女性を取り巻く環境に注目した研究の年代的傾向は、以下のように言うことができた。すなわち、これらの研究は1972年の2編を除けば、1978年から徐々に始められるようになり、1984年からようやく本格的に取り組みられるようになった。これらの時期におけるアメリカ女性史の背景をみると、1977年に全米女性会議^{注3)}が開かれており、その翌年からスポーツ研究においてもこのような視点が持ち込まれるようになったと理解することができる。さらに、長年にわたる女性開放運動の中心的事項であった、ERA^{注4)}の不成立が1982年に決定されている。今日ではこの出来事は、女性開放運動の衰退を表すのではなく、新しい方向性を探る運動の転換期としての意味を持つと考えられている^{注5)}。女性開放運動で使われてきた女性の立場による視点が様々な分野の研究に広げられ、スポーツ研究においても持ち込まれるようになったと推察できる。

従って、女性スポーツ環境研究は主として80年

代以降に注目され始めたともみなすことができる。

(3) 女性スポーツ研究における女性スポーツ環境研究

① Sociology of Sport Journal (SSJ) は、1984年に刊行されたスポーツ社会学の学会誌であり、北米のスポーツ社会学の研究動向を知るための主要な文献のひとつである。この1993年10巻3号までにAnnotated Bibliography (註釈付き文献解題)として28題が掲載されているが、そのうち女性スポーツに関わるテーマは以下に挙げた4題であった。

(A) Sport, Women, and Sexism (1985 Vol.2 No.3)

(B) Annotated Bibliography on Minority Women in Athletics. (1985 Vol.2 No.3)

(C) Sport, Sex-roles, and Sexism. (1986 Vol.3 No.4)

(D) Gender and the Media. (1990 Vol.7 No.4)

ここでも、'Gender' および 'Sex-roles' の用語がみられる。性に関わるその他の用語として、'Sexism' がある。その意味は以下のとおりである²²⁾。

Sexism : 性差別 (主義)。人種差別 (Racism) に倣って作られた語。性別を理由に人を差別する制度とその実践である。

'Sexism' は、「差別をする制度と・・・」とあり、これも女性学研究の視点に立つ^{注6)}、女性を取り巻く環境に関わる用語である。その他のおもな用語として、'Minority'、'Media' がある。

'Minority' は、宗教、政治上の少数派も指すが、主として民族的少数派を指し、'Sexism' が人種差別用語に倣って作られた用語であることからみても、女性を研究することと人種問題を研究することに深い関わりがあることが示唆される。また、'Media' はマスメディア、マスコミの媒体を意味するが、これらの女性スポーツの扱いに社会的な問題が存在することが推察される。

② 'The Social Significance of Sport' はスポーツ社会学のテキストとして1989年に出版された。著

者らは、永年にわたりスポーツ社会学を教授してきており、1978年にやはりスポーツ社会学のテキストとして 'Sport and d Social System' を著している。本著はそれを踏まえて書かれており、歴史的な流れを押さえた上での現状が明らかにされていると思われる。

女性スポーツに関する記述は、全11章の中の1章、Chapter 9 'Gender, Age, and Sport' において、6節にまとめられていた。

各節のタイトルに着目すると、'Gender' という用語が4つまでに用いられていた。従って、'Gender' という言葉の持つ視点は重視されていると言える。さらに、'Gender' は前述したように、必ずしも「性役割」を指している訳ではない。ここでは、その意味で特に 'Gender Role' という用語が用いられていた。

ここでは 'Gender' の定義として「社会的定義であり」、それゆえ、より平等なものに変えていくことが可能であると述べられていた。このことは、現代の女性は男性とは不平等なスポーツ環境に置かれているという意味である。

歴史的に見ると、社会の変化によって「性役割」は変化している。それに伴い、女性のスポーツ活動は飛躍的に増大してきており、その具体的な背景として、以下の6点があげられていた。

- (A) あらゆる社会の制度において、女性の地位が高められたこと。
- (B) フィットネスが単なる楽しみとしてより、健康面を強調されてきたこと。
- (C) 立法（アメリカの 'Title IX', カナダの 'Charter of Rights' など）により、女性差別に対してスポーツ活動を助ける制度的な基準が生じたこと。
- (D) 活動的で成功している数多くの女性の役割モデルが現れたこと。
- (E) スポーツ参加を抑制するような、多くの医学的、生理学的神話が研究によって否定されたこと。
- (F) いくつかの社会や社会階層において性役割への社会化に変化が生じたこと。

この中で、(B) を除くすべてが女性スポーツ

環境に関わる問題である。それでもなお女性のスポーツ活動は、参加人口は少なく、参加頻度は低く、競技レベルも一般に低いとされるのは、これらの望ましい変化によっても、まだ男性と対等な環境にはなっていないからであろうと思われる。

③女性スポーツ研究者である Greendorfer の研究視点を見ると、時代的な変化が見られた。70年代の研究は、'Female socialization into sport ('74)', 'Female sport involvement ('76)', 'Female sport pattern ('77)' など女性のスポーツ参与形態に関心が向けられていた。しかし、80年代後半からの研究は、'Gender bias ('87)', 'Gender differences ('87)', 'Gender ideology ('91)' など性差に関心が向けられ、大学における女性競技者やタイトルIXとの関わりなど、教育環境における女性スポーツ研究が主要なテーマとなっていた⁶⁾⁷⁾¹⁴⁾。

その他、Social Aspect of Sport ('83) でも女性スポーツを取り巻く環境として、スポーツが女性にふさわしくない活動であるというビクトリア時代の思想が残っていることが指摘されていた²⁸⁾。

以上のことから、現代の女性スポーツ研究において女性スポーツ環境研究が重要なテーマであることが明らかとなった。

II. 女性スポーツ環境研究の視点について

(1) 女性スポーツ環境の分析の視点

前章で検索した127編の論文を分析し、女性スポーツ環境研究に用いられる分析の視点について考察を行った。

これらの論文のキーワードを抜き出し、分類したものが表2である。

「性および性役割に関わる語」として、'Sex-roles' の頻度が当然のごとく最も多かったが、'Gender' はほとんど見られなかった。'Gender' はタイトルに用いられることは多いが、キーワードとするには弱い言葉であると言えよう。また、言葉そのものを持つ意図が強く、複合語を作りにくいとも言えるだろう。それに対して、'Sex' の

表2 Gender' Sex-roles'で検索された論文のキーワードの種類と使用頻度

性および性役割に関わる語	マスメディアに関わる語	運動における役割を表す語
Sex 2	Mass media 6	Ahelete 18
Sex-roles 122	Press 3	Elite athlete 2
Sex-differences 27	T. V. 3	Professionals 7
Sex-factor 14	Radio 1	
Sexism 11	Photography 2	研究方法等を表す語
	Journalism 1	Review 4
Role-conflict 9	社会との関わりを表す語	Questionnaires 3
Role-expectation 1	Socialization 14	Mesurement-methodology 1
Role-theory 3	Social enviroment 2	Labelling theory 1
Role-model 1	Social interaction 1	Cross cultural 2
Role-playing 1	Social change 3	Research 1
Gender-identity 6	Social factor 2	Survey 2
Femininity 25	Social structure 1	Evaluation 1
Masculinity 22	Socio-historical-modern 8	Comparative study 4
Women 54	Social perspection 2	Content analysis 1
Men 11	Social learning 2	Trend analysis 1
Girl 8	Social class 2	History 1
Boy 4	Antisocial behavior 1	Psychology 1
Androgyny 2	Sociology 6	Philosophy 1
Feminism 7		
Lesbianism 1		
	身体活動を表す語	国または民族を表す語
年齢による役割に関わる語	Sport 47	U. S. A. 11
Family 5	Leisure 6	England 2
Parent 1	Play 5	U. K. 2
Adult (hood) 2	Exercise 6	Britain 3
Child (hood) 9	Recreation 2	New Zealand 2
Infant 2	Physical fitness 4	Australia 1
Adlescence 4	Game 5	Alaska 1
Aged 5	Competition 3	Africa 1
(Aging,-factor,-difference)		Canada 2
	運動種目を表す語	Norway 3
学校や教育に関わる語	Gymnastics 1	Russia 1
Students 5	Aquatic sport 1	Soviet-Union 1
Nursery school 1	Hockey 1	France 1
Primary school 1	Racquetball 2	Italy 1
Elementary school 1	Soccer 1	Japan 1
Secondary school 1	Tennis 1	Greece 1
High school 4	Basketball 3	
University 7	Track and Field 3	その他
School 1	Weight lifting 4	Stereotyping 23
Education 1	Team sport 1	Equality-inequarity 9
Physical education 17	Motor skill 1	Sport-function-dysfunction 6
Education for leisure 1	Outdoor 3	Attitude 15
Co-education 1	Cheerleading 2	Sport-involvement 15
Teaching 3		Perception 9
Lerning 1		Participation 11
Coach 2		

複合語である「Sex-differences (性差)」や「Sex-factor (性による要因)」は多く用いられていた。また、「Role」もそのまま暗に「Sex-roles」を指しており、「Role-conflict (性役割葛藤)」「Role-expectation (性役割期待)」「Role-theory (性役割理論)」等が用いられていた。その他の中にあげた「Stereotyping」は固定的・画一的な観念やイメージを意味するが、女性に対しては性役割の固定観念として用いられることが多い。

「年齢による役割に関わる語」から、女性としての環境が子ども時代から出現すること、また、家族における役割との関わりが示唆されている。

「社会との関わりを表す語」は、「Gender」および「Sex-roles」が、女性を取り巻く社会環境としての意味を持っていることの裏付けとなるであろう。

「学校や教育に関わる語」から、子どもにとって、家庭以外の主要な社会である学校における視点は、前述した「年齢……」と併せると、重要な意味を持つと思われる。さらに、「マスメディアに関わる語」は、前節でも注目されていた視点であり、現代の社会環境に強い影響力を持つものであることから、これも注目に値するであろう。

「研究方法を表す語」は等質なものではないので概略を述べるにとどめるが、「Review」や「Content analysis」などの用語から文献による研究が、「Questionnaires」、「Research」、「Survey」などの用語から調査による研究がなされていることが推察された。さらに、「Cross cultural」、「Comparative study」などの用語から、異文化を対象としたものを含めた比較研究も行われているようであった。

この他、スポーツ研究であることから、「身体活動を表す語」「運動種目を表す語」「運動における役割を表す語」が、外国の研究であることから、「国または民俗を表す語」が、キーワードに挙げられていた。

以上のことから、女性スポーツ環境研究の中心として、教育やマスメディアが作り出す環境がどのようなものであり、性役割にどのような影響を与えるのかという視点からの研究の存在が明らかになった。また研究方法として、文献研究、調査研究などが見られた。

(2) 女性スポーツ環境研究の内容分析

ここでは、検索された127編とSSJに掲載された原著論文および研究ノート39編(一部は重複する)の女性スポーツ研究から、これまでに述べてきた女性を取り巻く環境という視点を抽出し、その研究内容を分析した。

これらの研究における視点は、以下の項目にまとめることができた。

- (A) 教育に関わる視点
- (B) マスメディアに関わる視点
- (C) 性差別(階層構造という制度的な面も含める)に関わる視点
- (D) 性役割葛藤に関わる視点
- (E) 人種、民族、年齢、階級などとの関連による視点
- (F) その他、男性側のもつ問題などの視点

この中で、(C)性差別、(D)性役割葛藤は重要な視点であるが、性役割との関わりが密接であり、女性を取り巻く環境として「性役割」を挙げた時点で顕在的なものとなっている。従って、ここでさらに検討する必要性は低いと思われる。また(E)については、アメリカにおいては重要な視点であるが、他国、特に日本で取り上げにくいものであろう。(F)については、「男性学」という言葉も時折見られるようになり、今後重要性が増すであろうが、現在ではまだ主要なものとは言えない。(A)教育と(B)マスメディアは前項でも挙げられた視点であり、以下この2点についての内容を分析した。

①教育という視点による女性のスポーツ環境研究

Coakley, J. と White, A.⁸⁾は、現在のスポーツ参加に性差があること、それには過去の体育と学校スポーツの経験が影響することから、スポーツへの社会化の性差は教育によって作られる可能性を示唆した。

Varpalotal, A.³¹⁾は、思春期の女子がスポーツを学ぶときに同時に「Femininity (女らしさ)」と「Sexism」を身につけることを、スポーツ教育における隠れたカリキュラムと呼び、性差がス

スポーツの社会化の場面に強く根ざしていることを明らかにした。

教師の持つ問題もあげられていた。Talbot, M.²⁹⁾は、スポーツにおける性の固定観念は教師の側の問題であり、体育授業においてそのことを十分に考慮する必要性を示唆した。Ignico, A. A.¹⁸⁾も同様な指摘をし、中性的なカリキュラムの開発が必要であると述べていた。

教材に関しては、Lopez, S.²³⁾が男女混合の体育授業を実態調査し、水泳のような個人種目には何ら問題は見られなかったが、集団競技においては生徒がすでに性役割を身につけていることから困難が生じやすいことを見出した。

また、Humberstone, B. J.¹⁷⁾は、野外教育での実態調査より、特に女子に自分の能力に気づき、自信を持つ傾向が認められたと述べた。性役割を要求される場面より、個人の能力が重視される環境を作り出せば、性による固定観念から逃れられる可能性が推察される。

これらから、教育の場で女性に性役割の固定観念が投影されることによって、女性のスポーツ環境が男性に比べて不利なものとなり、その影響が生涯にわたって続くことが明らかにされてきている。この事実を変えていくためには、教師の意識を変えることと、教材を工夫することの二つの側面からアプローチする研究が課題となるであろう。

②マスメディアという視点による女性スポーツ環境研究

すべての論文で、マスメディアにおける女性スポーツの否定的な扱いが指摘されていた。

Hillard, D. C.¹⁶⁾はテニス雑誌の内容分析から、男性は「Masculinity (男らしさ)」女性は「Femininity」の固定観念によって、性差が強調されている状況を明らかにした。

Theberge, N. と Cronk, A.³⁰⁾は、新聞の日常的な報道と女性スポーツの報道を分析し、否定的なあり方を指摘した。さらに、Kane, M. J.¹⁹⁾は、タイトルIX以降、女性のスポーツ参加者は増加したが、マスメディアは相変わらず固定観念を持ち続

け、以前と変わらない報道のやり方が続いていることを明らかにした。

若年者に対する報道の持つ問題を、Rintala, J. と Birrell, S.²⁷⁾は、若者向けのスポーツ誌を研究対象とし、女性役割モデルの固定観念から、活動的な女性の扱いに問題があると指摘した。また、Duncan, M. C. と Sayaovong, A.¹¹⁾は、さらに年少の子供向けのスポーツ誌を分析した。それらに掲載されている写真を、量・スポーツタイプ・競技者のレベル・コーチや監督という役割、カメラアングルなどの面から分析し、その男女差が性役割の固定観念に基づいたものであったことを明らかにした。

テレビによる報道に対しては、Duncan, M. C. と Hasbrook, C. A.¹¹⁾が注目し、ここでも女性のチームスポーツと一部の個人スポーツが否定的に描かれていることを指摘した。

これらから、マスメディアによって作られる女性スポーツのイメージが固定的なものであり、望ましい変化が現れてきているにもかかわらず、それを伝えていないことが明らかとなった。

マスメディアの環境は、情報の量、対象とするスポーツ種目とレベル、写真の用いられる分脈、カメラアングルなどによって男女の比較をする研究方法が利用可能性が高い方法であろう。

結 語

北米の女性スポーツ研究において、女性を取り巻く環境に視点を置いた研究が重要な位置を占めていることが明らかになった。また、これを「性役割」という言葉で代表することができた。歴史的に見ると、1980年代後半から盛んになってきていることがわかった。さらに、女性を取り巻く環境要因として、教育とマスメディアが注目されていた。それら研究視点は以下のようにまとめることができた。

- 1) 教師の持つ性役割の固定観念について着目する研究方法。
- 2) 教材自体の 'Sex factor' に着目する研究方法。
- 3) スポーツ教育の設定状況について着目する

研究方法。

- 4) マスメディアの情報の量に関する性差に着目する研究方法。
- 5) マスメディアが報道するスポーツ種目に持ち込まれる 'Sex factor' に着目する研究方法
- 6) 写真およびテレビ画面のカメラアングルとその文脈に着目する研究方法。

研究方法としては、調査研究や文献研究などが挙げられているが、前者は主として教育の中での状況を研究したものが多く見られた。それに対して、後者は新聞や雑誌などを中心に、出版物における状況の研究法として多く用いられていた。

近年、多くの制度が男女平等へと変化する中、未だ性差の大きいスポーツ行動の背景には、女性を取り巻くさまざまな環境が作りだした潜在的な役割意識があると思われる。それらをそのまま分析することは困難であるが、教育とマスメディアをまず研究対象とすることは有効な方法であろう。特に「学校や教育に関わる」視点は、日本のスポーツ環境が学校によって強い影響を受けている現状から見ても重要と思われ、今後日本にも広く取り入れられることが望まれる。

謝 辞

本研究の資料収集にあたっては、川西正志氏に多大なるご援助を賜りました。ここに記して謝意を表します。

注

注1) Women's Studies. 1960年代の終わりごろから、女性開放運動によって一般大衆の意識が変わり、これまでの学問が男性の視点でしか語られてこなかったことが指摘されるようになった。この男性中心主義を批判し、すべての事柄を女性中心の視点で見直すことによって作り出す、「女性の視点」による学問。

注2) 牧野紀子は「女性の社会的役割とスポーツ」でこの問題に触れている。また、木村元子

は「女性スポーツ報道における性差別表現に関する研究」で、マスメディアが作り出す環境に問題を見いだしている。しかし、それ以外には見あたらない。

注3) 1977年、テキサス州ヒューストンで開かれた会議。「女性が国民生活の総ての分野において完全かつ平等に参加するのを妨げている障害物を明らかにする」ために、約14000名が4日間にわたって討議を行った。連邦政府がスポンサーになっていたことも注目される。

注4) 平等権修正条項。米国憲法の修正を求めたもので、性別に基づいたいかなる法的差別も憲法違反だとする修正条項である。1923年に起草され、連邦議会に提出されたが、女性開放運動の高まりの中、1972年になって可決された。その後、50州中35州の批准を得たが、憲法修正に必要な38州には足りず、1982年に批准期限が切れ、不成立に終わった。

注5) ERA 不成立の持つ意味。この背景をみると、全米人口の3分の2を占める州が批准していたこと、全国的な世論調査では80年から81年にかけて支持率が58%から63%に増えてきていることなどから、限られた地域に住む少数の強力な反対運動によって修正のために必要な38州の批准が得られなかったことがわかる。また、公民権法の下での平等化の進行により、あえてERAを制定しなくても、現行憲法の下で十分男女平等を達成できるという議論もあった。さらに、フェミニズム運動の関心が性の開放に向かっていることによる不信感もあった。したがって、ERA不成立がそのまま女性開放運動が否定されたことではなく、今日のフェミニストが目指し始めた性の開放という新しい流れに対する抵抗が表れたと見なすことが出来る。

注6) 'Sexism' は1968年頃、米国の女性開放運動ではじめて使われた言葉である。性差別主義の状況は以前から存在していたが、

‘Sexism’ という名付けによって、その構造を明らかにし、改革が可能となった。

参考文献

- 1) Annotated Bibliography (1985) Sport, Women, and Sexism. *Sociology of Sport Journal* 2 (3) : 259-265.
- 2) Annotated Bibliography (1985) Annotated Bibliography on Minority Women in Athletics. *Sociology of Sport Journal* 2(3) : 266-280.
- 3) Annotated Bibliography (1986) Sport, Sex Roles, and Sexism. *Sociology of Sport Journal* 3(4) : 381-389.
- 4) Annotated Bibliography (1990) Gender and the Media. *Sociology of Sport Journal* 7(4) : 412-421.
- 5) 有賀夏紀 (1988) アメリカ・フェミニズムの社会史. 勁草書房.
- 6) Blinde, E. M., Grrndorfer, S. L. (1987) Structural and Philosophical Differences in Women's Intercollegiate Sport Programs and the Sport Experience of Athletes. *Journal of Sport Behavior*. 10 (2) : 59-72.
- 7) Blinde, E. M., Grrndorfer, S. L., Shanker, R. J. (1991) Differential media coverage of men's and women's intercollegiate basketball: reflection of gender ideology. *Journal of sport and social issues* (Boston, Mss.) 15 (2) : 98-114.
- 8) Coakley, J. and White, A. (1992) Makind Decisions: Gender and Sport Participati on Among British Adolescents. *Sociology of Sport Journal*. 9 (1) : 20-35.
- 9) Duncan, M. C. and Hasbrook, C. A. (1988) Denial of Power in Television Women's Sports. *Sociology of Sport Journal* 5 (1) : 1-21.
- 10) Duncan, M. C. (1990) Sport Photographs and SexualDifference: Image of Women and Men in the 1984 and 1988 Olympic Games. *Sociology of Sport Journal* 7 (1) : 22-43.
- 11) Duncan, M. C. and Sayaovong, A. (1990) Photographic Images and Gender in SPORTS ILLUSTRATED FOR KIDS. *PLAY AND CULTURE* 3 (2) : 91-116.
- 12) 江原由美子 (1991) フェミニズムとジェンダー. 今田高俊・友枝敏雄 (編), *社会学の基礎*, 有斐閣.
- 13) 江刺正吾 (1992) 女性スポーツの社会学. 不味堂出版, pp24 -25.
- 14) Greendorfer, S. L., Blinde, E. M. (1990) Structural-differences and contrasting organizational models: the female intercollegiate sport experience. In Velden, L. V. and Humphrey, J. H. (eds.), *Psychology and sociology of sport: current selected research*. Vol.2, New York, AMS Press, pp151-164.
- 15) 濱嶋 朗, 竹内郁郎, 石川晃弘 (1977) *社会学小辞典*. 有斐閣.
- 16) Hilliard, D. C. (1984) Media Images of Male and Female Professional Athletes: An Interpretive Analysis of magazine Articles. *Sociology of Sport Journal* 1 (3) : 251-262.
- 17) Humberson, B. J. (1986) Challenging Gender Steleotyping Through Adventure Education. *TREND AND DEVEROPMENT IN PHYSICAL EDUCATION. PROCEEDINGS OF THE VIII COMMON WEALTH AND INTERNATIONAL CONFERENCE OF SPORT, PHYSICAL EDUCATION, DANCE, RECREATION AND HEALTH*. July: 18-23.
- 18) Ignico, A. A. (1989) Elementary Physical Education: Color It Androgynous. *JOURNAL OF PHYSICAL EDUCATION, RECREATION, AND DANCE*. 60 (2) : 23-24.
- 19) Kane, M. J. (1989) Elementary Physical Education: Color It Androgynous. *JOURNAL OF PHYSICAL EDUCATION, RECREATION, AND DANCE*. 60 (3) : 58-62.
- 20) 神田道子 (1984) 変動期にある女性. 女性学研究会 (編), *女たちのいま*, 勁草書房.
- 21) 木村元子 (1991) 女性スポーツ報道における性差別表現に関する研究—日本の三大新聞に置ける女性スポーツ報道に用いられた言語表現の性差別イデオロギーの伝達機能について—. *体育・スポーツ社会学研究会編, 体育・スポーツ社会学研究10*, 道和書院, pp175 -194.
- 22) リサ・タトル: 渡辺和子監訳 (1991) *フェミニズム事典*. 明石書店.
- 23) Lopez, S. (1987) Mixed Sex Group in P. E.- Some Problem and Possibilities. *BULLETEIN OF PHYSICAL EDUCATION* 23 (1) : 19-22.
- 24) 前田博子, 川西正志, 山口泰雄 (1993) 日本体育学会第44回大会. 日本体育学会体育社会学専門分科会.
- 25) 牧野紀子 (1984) 女性の社会的役割とスポーツ. 菅原

禮監修, 現代スポーツの社会学. 不昧堂出版, pp205
-217.

- 26) McPherson, B. D., Curtis, J. E. and Loy, J. W. (1989)
The Social Significance of Sport: Gender, Age and
Sport. Champaign, IL: Human Kinetics
pp219-245.
- 27) Rintala, J. and Birrell, S. (1984) Fair Treatment for
the Active Female: A Content Analysis of Young
Athlete Magazine. *Sociology of Sport Journal* 1 (3) :
231-250.
- 28) Snyder, E. E. and Spreitzer, E. A. (1983) Social
Aspect of Sport: The Female Athlete, Englewood
Cliff, NJ: Prentice-Hall, pp155-173.
- 29) Talbot, M. (1986) Gender and Physical Education.
*THE BRITISH JOURNAL OF PHYSICAL EDUCA-
TION*. 17 (4) : 120-122.
- 30) Theberge, N. and Cronk, A. (1986) Work Routines
in Newspaper Sports Department and the Coverage
of Women's Sport. *Sociology of Sport Journal* 3 (3)
: 195-203.
- 31) Varpalotai, A. (1985) Sport, Gender and the Hid-
den Curriculum. North American Society for the
Sociology of Sport. Sixth Annual Meeting. Novem-
ber: 7-10.